

それ以上であらうが、九百あれば五十人宛と見て四萬五千人、六百人宛と見て五萬四千人の生徒があつたわけである。以て普及の程度も推想できると思ふ。固より田舎は江戸ほどに行くまいけれども、一寸今日から想像する以上によく普及してゐたものであらう。

又當代は政治の實權は武士にあつたけれども、それは社會の表面だけの話である、經濟上の實權は商人の手にあつたから、社會の内部に於ては武士は全く實權が無かつた。寺子屋が普及したのは此の點からも考へられる。平民の力、民衆の力が延びて來て、彼等の生活に必須なる教育を要求した爲である。まだ十分に機會均等な教育は行はれてゐないが、しかし教育上のデモクラシイも將に來ようとしてゐた。遠い將來のことではなかつた。

幕府の衰亡したのは色々の原因がある。これを教育史的に見れば教育の普及した爲であつたと言へる。幕府衰亡の原因の第一にあぐべきものは尊王論の勃興であつた。

これは言ふまでも教育の効果である。學問の開けない時は世人は將軍の權勢の強盛なのに眩惑して、皇室の尊嚴を忘れようとしてゐた。學問はその忘却から世人を救うた。始は一部有識の學者のみであつたが、教育の力によつて尊王論がひろく弘められた。國學者も儒學者も皆尊王論を叫んだ。

倒幕論が次第に勢力をえるやうになつたのは尊王論の力もあるが、また幕末に到り外國の事情が知れるにつれて、この強大なる外力の壓迫を脱する爲には王霸二重の政治では困ると氣附いたからであつた。東洋諸國は多く西力の魔手に亡ぼされた。我が神國は夢にもそんな事があつてはならぬ。この恐ろしい力から脱するためには二重の政治をやめて強固なる政府を樹立する必要がある。かく外國の事情が知られて來たのは教育の力でなくて何であらう。嘗つて文祿の昔、秀吉が朝鮮を征伐した時、朝鮮語を能くする通譯を召連れたといふ要求が出たら、秀吉は朝鮮人をして日本語を使用させ乍ら良いと言つたと言はれてゐる。此れは秀吉一人の豪語でなく、他の諸將もそ

れに同意してゐたのである。併し實際朝鮮へ渡つてから非常に困つたさうである。昔はこんな無鐵砲であつた。幕末にも随分無責任な攘夷論もあつたけれども、次第に單純なる攘夷は亡んで、倒幕論の口實の爲に攘夷を言ふか、或は世界の趨勢にうとい縉紳家に表面だけ言論を一致させた者が多かつたのである。

文久二年は幕府は制度を種々に改革した時、昌平校をも改革した。從來程朱學に限つてゐたのを擴張して折衷學者の芳野金陵をも登用した。學政擴張の議が起つた時金陵は建白して都下に小學數十箇所を設けようとした、幕府はその議を納れ建立の令を發し、奉行をも任命したけれども、幕末多事の際であつたから、實行が出来ずして止んだ。明治年間に始めて設けられ今日の盛況にまで發達した小學校も純然たる明治の産物では無かつた。日本人の教育意志は幕末に於て明治初年と似通つた所まで進んでゐたと思はれる。たゞ時が時であるから實行できなかつたのは残念であるがやむをえなかつた。

第八章 結語

以上で太古より江戸時代末まで教育現象の沿革の概要を述べて來た。さうしてそれは主として親が子を、成人が子供を如何にして養育し、如何にして次の國民を養成して來たか、その教育せんとする意志、教育せんとする精神を主題として筆を執つて來た。何分紙數が限定されてゐるので、各種の題目について詳述することが出来なかつた。なるべく廣く、種々の問題を集めようと思つたので、一つ一つの題目については、極めて簡略に説明するより仕方がなかつた。その爲にもしか著者の意味する所を十分に表現することが出来なかつたとしたら、著者の不文な爲であるから、著者自ら深く責任を帯びなければならぬ。

最後に明治以前の教育と以後の教育との差異を明にするために、明治以前の教育の

特質を二三列挙して見よう。

第一に従來の學校系統は大體において縦斷的であつた。横斷的でなかつた。今日は初歩の學校、中等の學校、高等なる學校と横に分れてゐるけれども、昔は一の學校で初歩から高等まで濟ませるのが普通であつた。これは色々の理由があらうが、その主たる理由はかうである。昔は教育上四民平等でなかつた。階級毎に學校があつた。上の階級は初等より高等までの數段の教育をうけると、生徒が少數であるため程度別に多くの學校を分けることが出来ないから一の學校で間に合せるし、下の階級は初歩だけを學ぶのであるから一種ですむ。昔の學校の遺物たる學習院は上流少數者の爲に設けられて居つて、一校の中に初等から高等まで揃へて備へてゐる所を見れば、昔の事もよく理解できると思ふ。

教材が儒教を中心とし、殆ど之に局限されてゐたから、教科書は經書又はその補充に限られてゐるし、教育の内容は先づ徳育を主としてゐた。従つて古典を尊重し、知

解の標準を古代においた。與へられたる一定の教説を教へるのであるから、記憶・誦讀に訴へることが多く、想像・發見によることは少い。新しい眞理發見の旅に上る教育に非ずして、規定された古い教義を如何に當代に適合させようかと工夫させる教育であつた。

學校や私塾に於て一齊教授もあつたに違ひないが、個別指導を行ふ機會が多かつた。概して師弟の關係が密接であつたから、知育にも徳育にも師法の化は今日以上に行届いたと思はれる。それは今日の教師の如く轉々相徙ることが少く、かなり永住してゐたから、その徳望が父兄子弟に比較的廣く知られてゐたこと、又教師の數が少なかつたから、割合に良い教師が多かつたこと、又一般民衆の知徳のレベルが低かつたから教師は民衆から相當の尊敬を受けたことなどに本づくのである。

教師は躬を以て衆を率ゐ、常に直觀的に良い模範を示し、他方生徒をして實踐努力せしめ、反復練習させて成徳を期した。今日の如く多くの斷片的知識を詰込むことな

く、少數の知識を與へ、それを教師の人格の熔鑛燿の中に入れて生きた知識となし、生徒が十分に熔融攪拌し或は咀嚼玩味して眞に我が物となし、これを實踐し窮行する。だから知識は知識として終らず、知識は必ず性格にまで強い影響を與へる。開發的教授が孔子の昔から尊重された所以もこゝにある。西洋の教授段階説と違つて博學・審問・慎思・明辨・篤行の五段は教授より訓練へ進む教育全體の順序である。しかも審問・慎思・明辨の三者は教授中でも明かに子供の自學自習を旨としたもので、説く所の趣旨は今日尙參考とするに足ると思はれる。

惟ふに教育の學的研究は進んでゐなかつた。殆どないと言つてもよい。しかし教育せんとする意志、努力に到つては、太古無自覺の時代からだんぐく進歩して來て、幕末には今日の壘を摩するほどの盛觀を示した。明治初年學制頒布以來我が國の教育が急激の發達をしたのはこの基礎があつたからである。江戸時代及びそれ以前の教育制度や方法は部分的には今尙參考となる部分があつても、大部分は亡んでしまつ

て、今日は全く役に立たない。それは教育のみならず政治・學術等多くの事に見うける現象である。併しながら、例へば江戸三百年鎖國の爲に太平となり、學問が勃興し、國史古典の研究が盛大となつて尊王論が勃興したから維新が成功した如く、又この三百年の間に(一)國民的自覺が強くなり、國內で殆ど自給自足してゐたため、幕末に突如として迫つて來た外國の壓迫を見事に押切り、かつ泰西の文明をよく吸収して、我が國が世界列國の伴に入つた如く、教育も江戸時代の末における教育意志の旺溢が害はれず益々大きく育てられて明治の昭代に持運ばれ、泰西の教育制度や方法を消化して今日の盛況を見るに到つたのである。昔の教育制度や方法は維新の幕と共に舞臺が改つたから、皆取毀たれてしまつた。新しい舞臺には新しい制度や方法が入用となつた。さりながら新しい制度方法を巧妙に運用して美しい結果を收めたのは昔の制度方法を巧みに運用したと同一の精神であつた。我々の祖先は二千年以上の長年月を費し、代々粉骨碎身してこの教育意志の發達培養に努力して來たのであつた。(大正

十二年十月

註 (一)日本人の國民的自覺がいつの世にも盛んであつたと思ふのは誤解である、時世につれて消長盛衰があつたことは言ふまでもないことである。

附 録

第一 年 表

備考

一 歴代天皇の御謚號と年號とは本文に出て来ないものをも併せて全部掲げておきました。
二 雄略天皇以前の日本史の記事には日本書紀の紀年に狂ひがありますから推定年代を添へておきました。

天皇	紀元	事 件
神武	元	天皇御即位(六〇〇年頃)
崇峻	四	鳥見山で皇祖天神を祭られた
安寧	一〇五	釋迦が生れた(一八四年滅)
懿德	一一〇	孔子が生れた(一八二年卒)
孝昭	四〇	秦の一統
孝安	四五	漢の一統
孝靈	四五	漢の武帝が五經博士を置いた
孝元	五五	四道將軍派遣(九〇〇年頃)
開化	五三	伊勢内宮を祀られた
崇神	六五	
垂仁		

天皇	紀元	事 件
景行	七五	日本武尊熊襲征伐
成務	八〇	神功皇后新羅征伐
仲哀	九五	王仁が儒書を傳へた(一〇五〇年頃)
應神	九六	諸國の租税を免された
仁德	一〇三	始めて諸國に史官を置かれた
履中	一〇七	氏姓を正された
反正	一〇七	
允恭	一〇七	
安康	一〇七	
雄略	一〇七	諸國に分れた秦民を秦酒公に賜つた
清寧	一〇八	伊勢外宮を立てられた
顯宗		

天皇 紀元 事件

仁賢 二七三 百濟が五經博士段揚爾を買つた

武烈 二七三 百濟が五經博士段揚爾を買つた

繼體 二七三 百濟が五經博士段揚爾を買つた

安閑 二七三 百濟が五經博士段揚爾を買つた

宣化 二七三 百濟が五經博士段揚爾を買つた

欽明 二七三 百濟が五經博士段揚爾を買つた

敏達 二七三 百濟が五經博士段揚爾を買つた

用明 二七三 百濟が五經博士段揚爾を買つた

崇峻 二七三 百濟が五經博士段揚爾を買つた

推古 二七三 百濟が五經博士段揚爾を買つた

舒明 二七三 百濟が五經博士段揚爾を買つた

皇極 二七三 百濟が五經博士段揚爾を買つた

孝德 二七三 百濟が五經博士段揚爾を買つた

齊明 二七三 百濟が五經博士段揚爾を買つた

天智 二七三 百濟が五經博士段揚爾を買つた

弘文 二七三 百濟が五經博士段揚爾を買つた

蘇我氏誅滅
大化元年始めて年號を建てられた
白雉元

唐の一統
始めて留學生を隋に遣はされた
小野妹子を隋に遣はされた
法隆寺を建てられた
憲法十七條を撰ばれた
聖德太子攝政(二二八一年薨)

石上宅嗣薨(年五十三)
天應元
寶龜元

始めて大學に勸學田を置いた
神護景雲三 太宰府が奏して史書を賜はつた

平安奠都
勸學田を加賀郡に置いた
坂上田村麿を征夷大將軍とした

太宰府に明法博士を置いた
大學入學を獎勵した
文章博士の位を昇された
藤原冬嗣が勸學院を建てた
最澄寂(一四二七生)

天長五 綜藝種智院式成る
承和元 文章博士を一人増した
空海寂(一四三四生)

仁壽元

天皇 紀元 事件

天武 一三五 家毎に佛像經典を藏せしめられた

持統 一三五 藤原遷都

文武 一三二 大寶元 大寶律令完成

元明 一三六 慶雲元

元正 一三六 和銅二 春日神社創建

元正 一三六 養老四 日本書紀撰上

元正 一三六 同 七 國學を按察使を置く國に限つた

聖武 一三八 神龜五 明法、文章の二博士を置いた

聖武 一三九 天平二 大學に給費生を置いた

聖武 一四〇 同 一三 國毎に國分寺を建てしめられた

孝謙 一四九 天平勝寶元 陸奥から黄金を出した

孝謙 一四四 同 六 吉備眞備が太宰大貳に任ぜられた(一四三五薨)

淳仁 一四七 天平寶字元 家毎に孝經を藏せしめられた

安史の亂が起つた

天皇 紀元 (年號) 事件

稱徳 一四二 天平神護元

光仁 一四〇 寶龜元

桓武 一四〇 天應元

桓武 一四一 延暦九 始めて府學田を置いた

桓武 一四二 延暦九 大學教官の職田を定めた

桓武 一四三 平安奠都

桓武 一四四 勸學田を加賀郡に置いた

桓武 一四五 坂上田村麿を征夷大將軍とした

平城 一四六 大同元 大學入學を獎勵した

嵯峨 一四七 弘仁一二 文章博士の位を昇された

嵯峨 一四八 同 文章博士の位を昇された

淳和 一四九 天長五 綜藝種智院式成る

仁明 一五〇 承和元 文章博士を一人増した

文徳 一五一 仁壽元

天皇 紀元 (年號) 事件

清和 一五八 天安二 藤原良房が攝政となつた

陽成 一五九 貞觀元 男山八幡宮の起

光孝 一五九 元慶五 在原行平が獎學院を建てた

宇多 一五七 同 三 藤原基經が關白となつた

醍醐 一五八 昌泰元 遣唐使を停められた

醍醐 一五九 延喜元 菅原道眞が左遷された(後二年薨)

醍醐 一六〇 同 五 古今集撰上

醍醐 一六一 同 一四 三善清行が封事を上つた

醍醐 一六二 延長元 道眞を本官に復した

朱雀 一六一 承平元 平將門を誅した

村上 一六二 天曆五 後撰集撰上

村上 一六三 天德四 藤原師輔薨(年五十三)

冷泉 一六四 應和元

圓融 一六五 康保元

圓融 一六六 安和元

圓融 一六七 天祿三 空也寂(一六六一生)

圓融 一六八 天延元

天皇	紀元 (年號)	事件
後醍醐	一九〇一 仁治二	藤原定家薨(年八十)
後深草	一九〇六 寛元四	北條時頼が執權となつた
	一九〇七 寶治元	
	一九一二 建長四	十訓抄が出来上つた
	一九一三 建長五	日蓮が日蓮宗を開いた
	一九一六 康元元	
	一九一七 正嘉元	
	一九一九 正元元	
龜山	一九二〇 文應元	日蓮が立正安國論を著した
	一九二二 弘長元	
	一九二八 文永五	北條時宗が執權となつた
	一九三〇 同一	文永の役
後宇多	一九三五 建治元	北條實時が金澤に退いた
	一九四一 弘安四	弘安の役
	一九四三 同六	阿佛尼寂
伏見	一九四八 正應元	
	一九五三 永仁元	
後伏見	一九五九 正安元	
後二條	一九六三 乾元元	
	一九六三 嘉元元	
	一九六六 徳治元	

天皇	紀元 (年號)	事件
花園	一九六六 延慶元	
	一九七二 應長元	
	一九七三 正和元	
	一九七七 文保元	文保の御和談
後醍醐	一九七九 元應元	
	一九八一 元享元	
	一九八四 正中元	正中の變
	一九八六 嘉曆元	
	一九八九 元徳元	
	一九九一 元弘元	元弘の亂が始つた
	一九九三 同三	北條氏滅亡
	一九九四 建武元	建武中興。二條河原落首
	一九九五 建武二	足利尊氏の反
	一九九六 延元元	吉野遷幸
後村上	一九九八 同三	足利尊氏が幕府を開いた
	二〇〇〇 興國元	
	二〇〇〇 正平五	玄惠寂(一九二九生)
	二〇〇四 同九	北畠親房薨
	二〇〇六 同二三	足利義滿が將軍となつた
長慶	二〇〇〇 建徳元	
	二〇〇一 文中元	
	二〇〇五 天授元	

天皇	紀元 (年號)	事件
後龜山	二〇〇三 元中九	南北合一
後小松	二〇〇四 應永元	節用集が出来た
	二〇〇五 同	足利學校が移つた
	二〇〇七 同四	金閣が出来た
稱光	二〇一〇 同二七	今川了俊卒
	二〇一八 正長元	
後花園	二〇一九 永享一〇	永享の亂
	二〇二一 嘉吉元	嘉吉の亂
	二〇二二 同二	足利義勝が將軍となつた
	二〇二四 文安元	足利義政が將軍となつた
	二〇二四 同	下學集が出来た
	二〇二九 寶徳元	
	二〇三二 享徳元	
	二〇三五 康正元	
	二〇三七 長祿元	太田道灌が江戸城を築いた
	二〇四〇 寛正元	
後土御門	二〇四二 文正元	
	二〇四七 應仁元	應仁の亂が始つた
	二〇四七 同	桂庵が明に使した
	二〇五三 文明五	足利義尙が將軍となつた
	二〇五三 同二三	一休寂(年八十八)

天皇	紀元 (年號)	事件
	二〇五三 同	一條兼良薨(年七十九)
	二〇五七 長享元	
	二〇五九 延徳元	
	二〇六〇 明應四	北條早雲が小田原を略した
	二〇六二 同八	蓮如寂(年八十五)
	二〇六三 文龜二	宗祇寂(年八十二)
	二〇六六 永正五	桂庵寂(年八十二)
	二〇六八 大永元	
後奈良	二〇六八 享祿元	王陽明卒(年五十七)
	二〇七三 天文一二	鐵砲の傳來
	二〇七九 同一八	天主教の傳來
	二〇八二 同二〇	大内義隆が害せられた
	二〇八六 弘治二	河中島の戦
	二〇八六 永祿一一	織田信長の入京
正親町	二〇九〇 元龜元	
	二〇九三 天正元	足利氏滅亡
	二〇九四 同九	安土の學院が建てられた
	二〇九四 同一〇	本能寺の變。山崎の戦
	二〇九五 同一五	豊臣秀吉が天主教を禁じた
	二〇九五 文祿元	朝鮮征伐
	二〇五五 同二	イソップ物語が翻譯された
	二〇五五 同三	伏見城を築いた

天皇 紀元 (年號) 事件

三三七 慶長二 朝鮮再征

三三六 同 五 關原の役

三三二 同 六 徳川家康が伏見に圓光寺を建てた

三三三 同 七 富士見亭文庫を建てた

三三三 同 八 家康が將軍となつた

三三五 元和元 豊臣氏滅亡

同 公家及び武家諸法度を頒つた

三三九 同 五 藤原惺窩卒(二二二一生)

三三六 同 三 紫衣禊奪事件

明 正 二九〇 同 七 林羅山が忍岡に聖堂を建てた

三三六 同 一五 島原の亂が平いた

後光明 三三五 正保二 木内宗吾が刑せられた

三三八 慶安元 中江藤樹卒(二二六八生)

一三四 承應三 隠元が歸化して黄檗宗を傳へた

後西院 三三七 明暦三 林道春卒(二二四三生)

三三八 萬治元 家綱が聖堂に弘文館と名づけた

靈元 三三三 寛文三 徳川光圀が彰考館を開いた

三三三 同 一二 網吉が將軍となつた

天皇 紀元 (年號) 事件

三三二 天和二 山崎闇齋卒(二二七八生)

三三五 貞享二 山鹿素行卒(二二八二生)

三三〇 元祿三 聖堂を湯島に移した

三三二 同 四 熊澤蕃山卒(二二七九生)

三三六 同 一 木下順庵卒(二二八一生)

三三〇 同 一三 徳川光圀薨(二二八八生)

三三三 同 一五 赤穂義士の復讐

三三三 同 中村惕齋卒(二二八九生)

三三五 寶永二 伊藤仁齋卒(二二八七生)

三三四 正徳四 貝原益軒卒(二二九〇生)

三三六 享保元 吉宗が將軍となつた

三三六 同 一 懷徳書院の起り

三三八 同 一三 萩生徂徠卒(二二二六生)

三三九 同 一四 石田梅巖が心學を説始めた

三三四 同 一 室鳩巢卒(二二二八生)

三三六 元文元 三輪執齋卒(二二二九生)

三三〇 延享元 寛保元

三三八 寶暦八 竹内式部が罪せられた

後櫻町 三三五 明和二 醫學館の起り

三三七 同 四 山縣大貳が刑せられた

天皇 紀元 (年號) 事件

二四三 同 六 賀茂眞淵卒(二三五七生)

後桃園 二四三 安永元 田沼意次が老中となつた

光 格 二四四 天明四 井上金峨卒(二三九二生)

二四七 同 七 松平定信が老中となつた

二四九 寛政元 三浦梅園卒(二三八三生)

二五〇 同 二 異學の禁

二五三 同 五 和學講談所の起り

二五七 同 九 聖堂を官學に引直した

二六一 享和元 本居宣長卒(二三九〇生)

同 細井平洲卒(二三八八生)

二四七 文化四 柴野栗山卒(二三九四生)

仁 孝 二四八 文政元 大鹽中齋叛死(二四五三生)

二四七 天保八 學習院の起り

二五〇 同 一三 平田篤胤卒(二四三六生)

二五三 弘化元 弘化元

二五三 嘉永六 ベリイ來朝

孝 明 二五三 安政元 講武所を開いた

二五四 同 三 開成所を開いた

二五八 同 五 醫學所の起り

二五九 同 六 佐藤一齋卒(二四三二生)

同 吉田松陰が刑せられた(二四四

天皇 紀元 (年號) 事件

二五〇 萬延元 櫻田門外の變

二五三 文久二 日光學問所を開いた

昌平校を改革し小學を設けようとした

二五四 元治元 長州征伐

二五七 慶應三 王政復古

日本教育史

附 録

第一 索引

備考 一 すべて發音の通りに配列し、長母音は短母音の

次に、ンは五十音の次に置きました。

二 人名書名は殆ど残らず掲げ、年號は全く省き、

その他は適宜取捨しました。

會津	三六、三九	明智光秀	一七	足利氏	一四、一五、一六、一七、一八
愛國心	一九、三三、三九、四一	安積良齋	三六	足利尊氏	一五、一六、一七
アイヌ人	三三	安積澹泊	三七	足利基氏	一五
青木昆陽	一八七	麻田剛立	三五	足利義勝	一七
赤本	三三	麻布教授所(江戸)	三五	足利義兼	一五
赤穂義士	一八七	朝野鹿取	九七	足利義尙	一七
悪業(いふ)	一五	淺見綱齋	二六	足利義政	一六、一八
		阿邪美都比賣命	二四	足利義滿	一六、一七
		足利學校 一五、一七、一八、一九、二〇、二五		足利義隆	一五
				吾妻鑑、東鑑	一三
				(引用)藤田三郎院宣を讀む	一五
				安土	二〇
				遊の道	一九、二八、四〇
				阿直岐	七、七
				阿知使主	四〇
				阿刀大足	三
				阿佛尼	一五
				油繪	二〇
				阿倍氏	一八
				阿部仲麻呂	三

尼がっ 九三、三五
 天照大神 二九、一八
 あめつちの詞 一二、二三
 天兒屋根命 二九
 天稚彦物語 一八
 雨森芳洲 二六、三九
 あやの(漢)高安茂 四
 新井白石 四〇、二六
 荒田別 三七、三九
 在原行平 一〇二
 有馬(肥前) 一〇三
 安齋隨筆 四〇
 闇齋派 二七、二八
 諧謔、諧記 六〇、一〇五、二四八、二九七、三五五
 安藤東野 二二三
 安徳天皇 一三三
 安然和尚 二九
 案摩生 九
 いひかみ(飯噺) 二六
 伊尹 三三
 家 一三、二三
 醫學、醫藥の術 三〇、三三、三三、三六五
 醫學館 二七、三〇
 醫學所(幕府) 二六
 醫學所(山口) 二六
 異學の禁 三七、三六
 池田光政 二四二、二七三
 生花(茶花を見よ) 二八三、二八四
 いさわ(石和)教諭所(甲斐) 二五
 伊弉諾尊、伊弉冉尊 四
 位子 六
 意識的教育 一七、四〇、四一
 石田梅巖 三三、二七、二八
 夷人物茂郷 三六〇、三六〇
 和泉 二四三
 出雲風土記 三
 醫生 九
 伊勢神宮 七
 伊勢大輔 一七
 伊勢貞丈 四〇
 伊勢貞親教訓 一七
 伊勢物語 一六、一七、一七、一八、二五〇
 異制庭訓住來 一四、一七、一八
 イソツブ物語 二〇三
 石上宅嗣 七、六
 板倉重宗 二七
 戴餅 九〇
 異端説 二七
 一條兼良 一三、一七、一八、一八、一九〇
 一條天皇 九〇、一〇〇、二六
 一乗寺村(山城愛宕郡) 二〇〇
 一休 一六
 一寸法師 一七〇、一八
 一夫一妻 一三、一六五
 一夫多妻 一三
 逸學 一〇〇
 醫道 一八

イ

伊藤仁齋 二二、三三、三三、三九、三九、
 三三、三三、三三
 (教育説)學問の功 三三、三三
 學問の綱領 三三
 學問の條目(文行忠信) 三三
 君子と聖人 三三、三三
 個性教育 三三、三三
 作詩 作文 三三
 修養の標準 三三、三三
 仁齋の教育説の特也 三三、三三
 性説 三三、三三
 道德主義 三三
 讀書法 三三
 伊藤東涯 三三、三三
 (學説)個性教育説 三三
 いなご草 (引用)胎教 三三
 稻葉迂齋 二九
 因幡の白兔 一八
 稻生恒軒 二二
 稻生若水 二二
 井上金峨 三三
 井上蘭臺 三三
 伊能忠敬 三三
 今様(流行の意) 二八
 今鏡 一五
 (引用)藤原忠通の修養 一四
 意欲 三三
 いろは 二二、二三、二三、三五、八二、八三、
 二五、三三
 伊呂波(狂言) 一八
 いはひびと(忌人) 三
 股 三
 院、院政、院宣 八五、一六、二二、二六、
 四、一七、二二
 九恭天皇 二九、四〇
 印地打 一五、一六
 印度 二、五〇
 陰陽 三三、三六、三六
 有爲轉變 一八
 鳥羽の表 四
 上河洪水 二七
 上野(江戸) 二八
 上杉憲實 一七
 上杉鷹山 三六、三〇
 浮世風呂(書) 二八、二八
 氏 二九、三三、三三、三三、三三
 氏神 元
 氏の上 二九、三三
 氏人 三
 宇治拾遺物語 一七、一五、一八
 (引用)藤原利仁のいも粥 八六、八七
 うぢの(菟道)稚郎子皇子 三三、四〇
 卯槌 三
 歌(和歌を見よ) 三
 歌垣 三
 宇多天皇 一五
 うたの(雅樂)寮 三九、七四
 宇宙 三三、三五
 有智子内親王 八〇

ウ

開原太勳	三六	永縁僧正	一四七	私塾	二七三、二七四
宇津保物語	八七、八八、一〇八、一〇九	英語	二六二、二六七	兒童の教育	二六六、二四九
(引用)仲忠母子山を下る	八八	観山	四三、五五、一九一、二〇二	兒童の養育	二三〇、二三六
藤原季英の苦學	一〇一、一〇三	嬰兒と言語	三〇三	兒童の遊戯	二四一、二四六
宇津保物語の孝證	八八、八九	易經	五、六、一七、二五、二六〇、三三、三三四	儒學の勃興	一七、一六
尉繚子	三四	江崎氏	三三〇	儒學の變遷	二三三、二三〇
宇都宮公綱	一七	エスイッタ教會	一〇一	習字の指導	二九五、二九六
乳母の名を繼ぐ	五	江戸時代	二四五、二四六	女子教育	二八一、二八五
産衣	一六、三二	江戸往來	二四五、二四六	諸侯の獎學	一九七、一八九、二七
産土神	一六、三二	江月時代	五、一六、一七、一八、一八七、一八八、一九一以下	昌平校の變遷	二四九、二六〇
産湯	九〇、一六六、三三、三三四	異學の禁	三三	庶民の教養	二四一、二四九
産屋	二五、八九、一六、一六六、三三	學界の大勢	三三、三三〇	心學	二七、一八〇
馬の乗始	一三	教育學說	二六六、三三九	直觀教授	三〇二、三〇四
生れながら知る	二九、三三	近代的傾向	一九一、一九四	寺子屋の狀況	二四一、二四九
梅津長者物語	一八六	訓練の方法	三〇一、三〇〇	天主教の傳播	一九五、一九六
浦島太郎	一六九、一七九、一八五、一八七	元祿時代の學術の發達	二八、三三	童話の發達	一八七、一八八
雲州往來、雲州消息	一三〇	國學、國文學	三〇一、三〇〇	讀書の指導	二九六、二九八
芸亭	九	作文の指導	二九	博士家	三五
		鎖國の利害	一九五	幕府の獎學	二三三、二三七
				幕府の寺子屋政策	二四二

幕府の學校	二四九、二五五	大江資衡	二六五	道德才藝	三七
藩學	二五五、二七七	大江朝綱	二六、二四九	父母の徳教	三八、三九
佛教	二七五、二七七	大江匡房	一〇四、一〇九	文武の關係	三三
文運の復活	一九六、二〇一	大江匡衡	一九	菽生徂徠	三三、三五、三六〇、三六〇
平民の勃興と其の勢力	一九四	大鏡	一五	(學說)學の種類	三三
烏帽子親、烏帽子子	一三四	岡島冠山	一〇八	漢文直讀主義	三九
江村專齋	一七四	緒方洪庵	二六二	君主論	三六
圓覺寺	一九	岡田寒泉	二五二	個性主義	三六、三七
延喜式	三、九六、九、一〇一	岡太夫(狂言)	一九〇	古文辭研究の必要	三八、三九
圓光寺	一九、二〇〇	岡山、岡山侯	二七、二四二、二七三	性	三六、三五、三六
圓太曆	一四	小川氏(喜代藏)	三三	四教(詩書禮樂)	三六、三五、三六
厭世思想	一三、一三五	小川村(近江高島郡)	二七、二七四	仁	三五
		起上り小法師	二六	聖人	三〇、三一
		王羲之	七、七四	徂徠學說の特色	三九、三〇
御家流	二九六	翁問答	二二、三〇、三二、三三	助けて大をなす	三八
大炊寮	九四、九六	(引用)天道と人道	三〇	博文約禮	三三、三四
小碓命	一八、一九、二二	學問の本質	三四	先づ大を立つ	三六、三四
大内義隆	一九、二五	人道を孝といふ	三四	道の意味	三〇、三四
大江氏	一〇五、一一、三五	胎教	二二	奥田頼杖	二八
大江音人	一〇四				

大國主命	一六、一八、二〇、二五、三〇、三六	大伴氏	四七、五八	往來物	三〇、一八、二〇、二五、三〇、三六
後れたるに鞭うつ	三〇九	大伴家持	三〇、五八	和蘭、和蘭人	一五、一六、二〇、二五、三〇、三六
大郷金藏	二五九	大友皇子	三	蔭位、蔭子	六五、一七
大浚へ	二四六	同じ親	八、一三	温故堂	二六四
大海人皇子	五	鬼事(遊戯)	二五	音樂(管絃を見よ)	三〇
大鹽中齋	二六	大汝命(大國主命を見よ)	二五	音道	三〇
王守仁(王陽明を見よ)	二四七	小野蘭山	二九	御儒者(昌平校)	一八、二〇
王晋升	二四七	姨捨山	一五	御曹子鳥渡り(書)	一八、二〇
廣神天皇	一七、三三、三六、三九	王彌	六〇	音博士	四、五、六、九、一〇、一五
王辰爾	四	近江聖人	二七	女今川	二四五
大洲(伊豫)	二七	大御祖	五	女孝經	二四五、二四七
織田信長	一四、一六、一七、一八、一九、二〇、二一	嚶鳴館遺草	三二、三六	女四書	二四七
太田錦城	三〇三	おも(姆)	二六、三〇	女實語教	二四五、二四七
太田道灌	一三九	おもち、(父)	五	女大學	二四五、二四七
太田氏(亮)	八三	大森文學士(金五郎)	二〇	女論語	二四五、二四七
落窪物語	一五	おや(の古義)	二四、二六、三〇、三五、三六、三九	女は夫を以て天とす	二六三
大槻俊齋	二二	おや(の古義)	二以下	陰陽寮、陰陽道	五、六、九、一〇、一五
オアイツセア	一〇三、一〇四	王陽明	三二、三三	陰陽生	五、六、九、一〇、一五
オアイツセオス(ユリツセス)	一〇三	親子の愛(各時代を見よ)	三二、三三	力	六
お伽草紙	一五、一六、一七、一八、一九、二〇	尾張、尾張侯	二八、三五、三〇、二九、二七〇		

夏(國名)	五五	兒童の躰け方	三六—三八	柿本人麻呂	八
何晏	六一	隋年教法	三二—三四	學(支那古代の學校名)	五、五六
海軍所	二二三	體育論	三七	學院(天主教の)	一〇一
外交譯史	四〇	手習の指導	三六、三七	學習院	二六五、二六六、二六四
開成所	二二二	徳と藝との關係	三〇、三一	學習館	一〇〇
懷徳堂	三三、三四	讀書の指導	三四、三五	學生(明經の)	五、六、一〇、一〇三、一〇八
孩提の童	三三、三四、四八	博學主義	三九	學生料	九、一〇一
會讀、會業	二四—二七、二〇、二二、二八〇	反復練習	三三	學職頭	五四
開發	二七—三〇	文武本末論	三〇、三一	學の知行二義	二六—二九、三五
貝原益軒	二九—三三、三三—四〇、二八	遊戲論	二九	格物致知、格致	二二、二三、三四、三五〇
(學說)學問の法	二六—三七	懷風藻	七	學問、學術、學藝、學文	四三、四六、四四
教育の時期	三六、三七	蟹滿寺緣起	一六	學問の順序	二九—二九五
教育の必要	三六	外來の文化	二八、四	學問の目的	二七—二八九
教育と年齢	三七	鑑草	三四	學問試	二五—二五七
教育の理想	三六	(引用)幼少より成人の振舞	二七	學問所、學文所	一五、一五、一九
嚴格主義	三六	河海抄	二二	神樂歌、(引用)韓神	八七
作詩、作文の指導	二九、三三	雅樂寮(うたれう)	二〇、一四	學林(天主教の)	二〇三
女子教育	三六、三九	下學集	二五—二三	學令	四
		家學の興起	二五—二三	家訓、壁書	一五
		加賀郡の勸學田	四、六		

家訓(益軒の)	三三三、三三四	學校六九、一〇一、一〇二、一〇三、一〇五、一〇六、一〇七、一〇八、一〇九	道德心	一五二—一五三
(引用)義方の訓	三八	一〇〇、一〇二、一〇三、一〇四、一〇五、一〇六、一〇七、一〇八、一〇九	武家政治	一五二—一五三
詩を作るべからず	三九		武士の學力	一五二—一五三
蜻蛉日記	八九、一〇五		武士道の發達	一四一—一四二
(引用)安永二年の遺言書	三三		佛教	一六一—一六二
小きき人に手習	二二		平民の學力	一五二、一五三、一五八
鹿兒島	二〇、二二		遊戲	一五
風車	二二		鎌倉武士	一四三
加持	九〇		鎌倉幕府の滅亡	一〇
炊屋姫尊	三三		髮置	一七、一三三
春日神社	元		かみつけぬ(上毛野)氏	三七、元
春日皇女	一六、三六		紙鐵砲	二六
かづき初	三三		神代(じんたい)	
荷田春滿	三三		神亭名川耳尊	三
片假名	二五、二九、三三		賀茂氏	二八
語部	三三、三三		賀茂忠行	一〇
かちく山	一七		鴨長明	一五
學館院	一〇		賀茂眞淵	三
學記(禮記の)	一〇		賀陽豊年	九
學級	二五、二六		唐玉	五
甲子夜話	三三、三三			
月渚	一九八			
甲冑、甲冑始	一三、一三、一四、一七			
假名	二二、二六、二七、三三			
かな法師	一七、一六			
金澤文庫	一五、一七、一六、二〇			
兼明親王	一四			
姓	二			
鎌倉	一四、一五、一七、一七			
鎌倉時代	三、二、一〇、一〇、一九、二〇			
家庭生活	一三—一三			
親子關係	一三—一三			
教育衰微觀の否定	一六—一六			
敬神	一五—一四			
古典の教育	一四—一三			
宗教心	一三、一三—一四			
女子の教育	一五、一五			

カルク	一〇三、一〇六	漢詩、漢詩文	七三、一〇九、一四一、一四七、一五三、一五七、二〇〇、二〇九、三〇〇、三〇〇、三〇〇、三〇〇	氣	二〇九、二一〇、二一四、二一五、二一五、二一六、二一六
河内	二六、九四、九四、一〇三	漢書	七〇、七二、八〇、二五	義(仁義を見よ)	二〇六、三〇八
漢	二一〇	官職の世襲	二一六	木内宗吾	一九六
漢醫方	二二	漢籍	七三、一四九、二七、三九	祇園南海	二六
寛永諸家系圖傳	二七	勸善懲惡	三三	氣質	二〇九、三五九
顔淵、顔子	二五、三〇、三三、三五	神田教授所	二六	氣質の性	二一〇
漢學	一〇七、一〇八、二九、二九、以下	桓帝(漢)	二	氣質變化	三三、三三
漢學教授法	二五、二五、三九	漢土崇拜	二、三六	鬼室集斯	五
漢學の傳來	一七、二〇、二七—三二	漢土史料(昌平校)	二、二七	寄宿舎	二五、三〇
勸學院	一〇一、一〇三、一〇八	觀音經	一八	寄宿生	二五、二五、二五
勸學院	六八、七〇、七四、九八	漢文、漢文學	九八、一〇三、一〇四、一〇七、一〇七	機織(はたをり)	一六
成宜園	二四	漢文直讀法	二五、一五	貴賤上下おしなへて	一六
菅絃	八〇、一〇九、一一〇、一一三、一四七、一七三	寛平遺誡	三九	貴族	二二、二二、三三、四〇、四七、七一
菅家遺誡(引用)和魂漢才	二、一〇八	桓武天皇	一〇〇	貴族の教育(各時代を見よ)	八六、九二、一〇五—一一五、一一三、一二六
菅公	一〇八、一七四	管領	一〇〇	貴族の生活	八二、八六、一二五
菅茶山	二七	甘蓮湯	一三	北野神社	二五
漢才	一〇三、一〇八、一七三				
漢字	三三、三六、四〇、一一一、一四七、一五八				
	一八二、三三—三三六				

北島親房	110	弓馬の道	111
北村季吟	119	窮理	111-113, 112
穂杖	116, 115	窮理格物	112
橋窓茶話	114	教育學	7, 216
記傳道	113	教育行政	111
記傳博士	113	教育史研究の目的	6, 7
徵典館	114	教育制度	8, 117, 115, 115
木下順庵	116, 119	教育せんとする意志	51, 9, 116, 113
紀貫之	114, 114	教育説、教育論	116, 115
騎馬(馬、乘馬を見よ)	110	教育の可能	119, 116, 113
吉備眞備	110	教育の必要	114, 116, 112
義方の訓	116, 116	教育の普及、擴張	110, 111, 112, 115
君は群なり	116	教育の責任	117, 118, 114, 115
擬文章生	116	教育の時期	118, 116, 117, 117
客観的自然主義	116	教育の機會均等	118, 117, 118
鳩翁道話	116	教育の民衆化	118, 119, 118, 119
急就章	116	郷學	110, 116, 113, 113
仇首王、久素王	116	教科書(各教育學者参照)	119, 115
義勇の精神	110, 101, 110		114, 113, 113, 115-117
弓馬の家	114		
		行儀作法(禮を見よ)	111-116, 116, 115-119
		居敬	111
		狂言記	116, 115, 117, 118-113
		仰高門日講所(昌平校)	119
		教材(各時代及各教育學者参照)	119, 111
		教授(知育を見よ)	114, 117, 113, 118
		教授方(昌平校)	114
		教授所(昌平校附屬)	119, 110
		教授の段階	111, 114
		教師(師道を見よ)	113, 115, 118, 114
		教師の感化	113
		堯舜	110, 110, 113, 113, 118
		御註孝經	110
		京都	119, 113, 110, 111-116
		京都往來	114-117, 110, 114-111, 以下
		清水觀音	115, 116
			110

清水氏	117, 115	嚴管抄(引用)今の世は學問衰ふ	110
清原教經	116	男女によらず天性の器量を	116
儀禮	116, 114	公卿補任	116
義理	110, 111, 113	公家	115, 114, 117-119, 116
ギリシヤ人	115	公家諸法度	115, 116, 115
貴嶺問答	114, 117	九華和尙	116, 110
近仇首王	116	公事(儀式の義)	116
近思錄	116	九條殿遺誡(引用)學問の條目	110
謹身往來	115, 116	九條の太政大臣(藤原伊通)	115
金田一文學士(京助)	110	九條良經	114
禁中並公家諸法度	110	楠木正成	119, 116
(引用)天子諸藝能の事	110	くせ(曲)舞	110
勤王、勤王論	111, 116-118	久世郡(山城)	114, 119
禁秘抄	111	百濟	116, 119, 111
欽明天皇	115, 111	句讀	116, 116, 115
喰初	113	句讀の師	110, 111
空海	113, 111, 111, 119	空鑑を煮る	113
くがたち(盟神探湯)	111, 111	國博士	119, 117
		口分田	110, 111
		熊澤蕃山	117
		阿新丸	116
		公羊傳	119, 114
		藏人	117, 116
		栗山潜鋒	117
		困しんで知る	119
		訓誡、訓諭	117, 118, 117, 113
		軍艦操練所	113, 115
		訓話	118, 116, 111
		郡司	116
		君子	110, 119, 111, 113, 110
		君子は本を務む	111, 115, 112, 118
		君子は命を知る	110
		君主の論	113, 114
		群書治要	110
		訓讀、訓點	110, 119, 115
		訓幼字義、(引用)個性教育論	119
		訓練	114, 110, 117, 117, 111

訓練の機會

三〇一—三〇九

ケ

藝、藝能	一〇〇、三二七、三三三、三三〇、三三二
桂庵	一六、一六六
經科(昌平校)	二五〇、二五三、二五七
敬學館	二六九
敬教館	二六六
敬業館	二六四
景行天皇	一八、一六六、三
藝術	四三、五〇、八一、二二六、二四六、二七三 一九四、一九五、二〇三
敬神	三〇、七二、三六、一五一—一四〇
敬神と忠君との一致	三〇
刑政科(昌平校)	二五七
契沖	三三〇、三三一
經傳、書傳	一一〇、一一三
經史	一〇五、二〇〇、三三三、二九七、三〇〇、三三三
經史子集	二六八
經書	二〇八、二二四—二九、二六六、三三〇

三二、三三、三六

慶長見聞集	二八五
(引用)童子あまねく手習ふ事	二四二
啓發、啓發的	二〇五、二九三
桂林遺芳抄	一四
下剋上	一六三、一六六
外書(儒書)	七九
蹴鞠	一五三、一六二、一八〇
兼愛	二〇六
眼阿	一八四
護國、護國學派	三三、三三五
玄惠	一四四、二四八
幻雲詩稿	一八一
嚴格主義	二二四—二三八、三〇四、三〇五、三三八 三三七
兼好法師	一六九
元寇	一四〇
源氏	二七、二四三、二九二
源氏の君	八九、一〇五
源氏物語	八三、八四、八八—一〇九、一八、二〇

一四八、七一—一八二、三九、三〇

(引用)同じ頃通ひし所	二二
貴族學問の目的	一〇六
受領と言ひて人の國に	八三
才を本としてこそ	二〇八
難波津をだに	一一三
もののおやめ見給へわくべき	八三
わざとの御學問	一〇九
元正天皇	五四
見性の工夫	二八〇
建長寺	一七
遣唐使	八、九五、九八
劍道、劍術	二二、一七五、二七、三〇〇、三〇〇
建仁寺	一七六、二四
元服	九二、九三、一〇〇、一〇三、一〇七 三三三、三三四
拳法	三三〇
憲法十七條	四三、四四
源平盛衰記	一三〇、一四〇、一四一、一四五、一七一
元祿の復古運動	二〇、三三

コ

子(の古意)	元
孝(の古意)	元
校(支那古代の學校)	五、五
公案	二〇
孔安國	六二、六三
孔安の役	一四
古醫方	三三
小一條の左大臣(藤原師尹)	一一
子を賣る	五三
五戒	二六
古學、古學派	三三、三三三、三五
光格天皇	二七四
古賀精里	三三、三三六、三五一
語學所	二六五
後漢書	七〇
虎關	一五四
講義(講釋を見よ)	二五、二五七
古義堂	二四

五經

五經博士	四一、七〇、一八三、二八二、三五五、 二五七、二九七、三三三、三三六
孝經	四一、四二、四六
貢舉	五八、六二、七〇、九〇、一三三 二四五、二六六、二九七、三〇〇— 三〇四、三三三—三三三
五教館	二七二
廣業館	二七二
古今集	八三、八四、一三三、一七三
古今傳授	一七三
古今著聞集(引用)殿上の其の胸	一〇九、二〇
國學(學校の)	五四、五五、六二、六八—七〇 七六、八二、九七、九八
國學(學問の)	二五三、二五三—二五三、二六六、二七〇
國語(書名)	二五三、二九八
國子學	五七、五八
國子監	五七
國司	六八、八三
國府	五五、七六

國分寺

國分寺	六八、八二
極樂	一三六、二七六
穀梁傳	五八、九三、三三四
國民的精神	一一、一〇八、一三三、一三三
國民的志操	一三
江家文庫	一〇三
孝謙天皇	七〇、七三、八〇
孝行、孝養	六六、七三、八〇、一三三、一三三 一三六、三二—三三六、三三四 三三三、三三七
口語文	一六八
後光明天皇	二五
志	二九二
五山	四三、一六八、一八八、一九九、二二三
後三年の役	二二三、三三
後三條天皇	九六、一六六
吳子	三三四
孔子	五四、六二、一四八、一〇四、一〇五、二二八 三三三、三三四、三三九、三三〇、二八八、二九一— 二九三、三〇九、三三〇、三三三、三三三、三三三

孔子の開發主義	二九二	講釋	二五、二六、二七、二七、二七、二七、二七、二七、二七、二七	遊戲說	二五
孔子の個性主義	二〇四、二〇二	講釋試	二五	後土御門天皇	二七
孔子廟	二八	五十音	三三	孝弟	二五、二六
孔子家語	一九九、一九七	講習堂	二七	古典趣味、古典尊重	一四、一五、一七
腰折雀	一八六	五常	二〇九、二一〇、二一六、二二〇、二二四、二二九	古典文化	一八
こしき(頷)	一三三	五常五倫名義(書)	三三、三四	五曹(古數學)	六
古事記	三、四、二五、二七、三三、三七、三九、四一、四二	興讓館	二九、三〇	琴(彈琴を見よ)	二六
(引用) 允恭天皇氏姓を正し給ふ元	三	古狀補	一六九、二四五、二四六	弘道館(水戸)	二六
大國主命の長歌	三	古狀補	一六九、二四五、二四六	弘道館(彦根)	二六
神八井耳命の遜讓	三	證學派	三五、三九	弘道館(佐賀)	二七
本牟智和氣皇子の養育	二五、二六	個人教授、個別指導	二四九、二五〇、二五三	巧盜説話	一八
日本武尊が兄命を殺された事	二八	個性	二九、三六、三六、三六、三六、三五	小西博士(重直)	二〇
古事記傳	二二、二二、三三、三三、三三	後撰集	一三	紅梅殿	二〇
皇室	三〇、三五、四三、四三、五一	姑息の愛	一七、三六	小早川隆景	一九
故實	一四、一六、一六、一七、一七	梧窓漫筆	三〇	後花園天皇	一九
古事談	二四、二四、二四、二五、二五	後醍醐天皇	一五、二六	後花園院御消息	一七
(引用) 關東北條孫少女云々	二六	古註	一九三、二五、三六、三六	興福寺	四、一九
麴町教授所	二五、二五	小槻氏	二八	講武所	二六、二六

古文辭學	三三、三三、三三、三三	才、才藝	三七、三七、三六、五一	策	一〇一
弘文院	九五、一〇一	宰我	三九	作人館	二七
弘文館(昌平校)	一〇	歲試	五、六	作文(作詩のこと)	六、七、二二
弘文館(唐)	二七	祭祀	二一、二四、二四、二四	作歌(和歌のみよ)	二二、二二、二二、二二、二二、二二、二二、二二、二二、二二
御文章	二七	祭祀	二〇、二〇	作文科(昌平校)	二五
皇邦典故科(昌平校)	二〇	祭酒	二〇、二〇	作文指導法	二五、二九、三五、三五
弘法大師	一九	才色兼備	三六	佐倉宗五郎	一九、一九
獨樂	九三、一五、一六、一五、一五	酒掃應對	五、三〇七	鎖國	一九、二〇
語孟字義	三三	才德	三〇	狹衣物語	一四
(引用) 學問は道德を以て本とす	三三	齋藤道三	一六	薩埵德軒	二八
固有の文化	二一、二八、二九、二九	裁縫	八〇、一五、一五、一五	雜筆往來	一八
小弓	九三、一五	ざえ(才)	二二、二四、三三、三三	薩摩	一九、二〇
幸若舞	一八〇	坂上田村麻呂	一〇七、一〇八、一五〇	左傳(春秋左氏傳を見よ)	三六、三六、三六、三六
戸令	六	榊原篁洲	二六	佐藤一齋	三六、三六、三六、三六
五倫	三三、三三、三三、三三、三三	嵯峨天皇	五	佐藤信淵	三六
今昔物語	七、二〇、二〇、二四、二四、二四、二四	坂上氏	一七	佐藤直方	二六、三〇、三〇
(引用) 姨捨山の話	一七	坂本地主権現	八、一七〇	ザビエル	一〇一
鬼一口の話	一七	さきもり(防人)	七、七	作法(禮を見よ)	二七、三〇、三六
唐の事も此の朝の事も	一五〇			沙本毘古王	二

浚へ	二二八	三分の飢と一分の寒	二三四	試験	五、六、六、二四八、二五二、二七
猿蟹合戦	一八七	三禮	六二	自遣往來	二四六
猿源氏(お伽草紙)	一九、一八四	三略	三四	燕元抄	一六六
猿の生贖	一八六			子貢	三五九
三要	一九、二〇〇			四行	三三八
算學	七〇			子思	一〇六、二〇、六二
三國志	七〇			史實の傳説化	一八七、一八八
算術、算用	五、二二、三〇〇、三九、三九			祖父祖母の物語	一八五
三從	一八九、一九〇、二八二			磯石(狂言記)	一八八
三十六歌仙	一一三			時習館(大聖寺)	二六九
三條中納言(朝成)	一五〇			時習館(熊本)	二七一
算生	六〇、七			私塾	九、七、一〇六、三三、四二、二二
三代格	六			四書	二七、二七、二六九
三體詩	一七			治承御産記	一七四、一八二、二八、二五二、二五五、二六
三代實錄	九〇			辭讓の心	一〇六、二〇七、三三、三五
算道	五、五、六、九、三、二八			志築忠治郎	二九
山東京傳	一八五			詩書禮樂	三六三、三六四
産婆	三三			開谷學校	二四二、二七三
算博士	五、九五				
讀佛乘の因	二七一				

子孫なき願	一四、一五	支那音	六、八、一〇、一五、一七、二三以下	釋氏往來	一五四
子孫の教戒	三二、三八、三五〇	支那古代の學制	六〇、六九	尺素往來	一八四
舌切雀	一八、一八七	支那儒學の變遷	五—六	釋寔	五四、六二、九三、一四八、二五二、三〇九
四端	一〇六、二一〇、三三、三五、三五六	支那の文化	二四—二三	釋日本紀	二七
自治	三〇七	士農工商	二一七、八七	射御	二〇、三三
七去	一八九、二六、二六五	忍岡(上野)	一九四、三〇	三味線	二六四、二八五、三九
七書	三三、三四	柴田鳩翁	二八、三〇	周易(易經)	二〇六、三三、三五
十訓抄	一五、三〇、一七、一四八	柴野栗山	三三、三六、二五	羞惡の心	二〇九、三三
(引用)學藝の家に生れし者	三三	司馬法	三四	朱晦庵(朱子を見よ)	二〇九、三三
實語教	一九、二四、二八、二四、二四五、二四七	持佛堂	一四八	拾芥記	一四八
集註	二八〇	詩文(漢詩文を見よ)	二五〇	儒學	四〇、九二、一〇六、一一三、一一五、一一
實用の學	三三	詩文科(昌平校)	二九四、四〇〇、三〇一	守覺法親王	二八六、三三、三四、三六〇
師弟の情	一八二、三〇七	思辨	二九四、四〇〇、三〇一	儒教、儒道	四一六、七一、二二、四、七六
師弟の禮	一〇四—一〇七、三三	師法の化	一〇七、二〇八	儒教の傳來	九七、一九〇—二〇四、二二五、三九
師道	一八二、二四八、三〇四—三〇七、三七三	四民	一九四、三六	修教館	二四〇、二四一、二七五、二七六、三三〇
兒童の養育(各時代を見よ)	三六、三七	時務策	五八、六	綜藝種智院	一七、二〇、三〇—四二
兒童の躰け方	三九	下河邊長流	二二〇	秀才	六—六八、一〇四、一四八
兒童の尊重	五、五四	四門學	二七、二七、三六		
持統天皇	二、四、一七、二〇、三三、三八、四三、五〇	社會教育			

珠算	二七	十二ヶ月往来	一四	小學(支那古代の學校)	五、六
十三經	三三、三四	十八史略	二五、二九	小學(書)	二四一—二五九、二八〇、二九七、三〇三
朱子	二〇九—二四四、二六六、二九二	修文館	二六五	獎學院	一〇三、一〇五、一六二
習字	八〇、一一一、一二三、一四四、一五九、一八一	修猷館	二七〇	初學課業次第(書)	二五九、二九七
習字指導法	二四〇、二四三、二六三、二九五、三三三、三五〇	周禮	二七〇	小學校	七、四九、二九三、三六一
朱子學(程子學を見よ)	二九五、二九八、三三六、三三七	周濂溪	二〇八	女學範	二八三、二八五
修身(修身齋家)	一〇九、二二一、二四七、二八〇	舜	五五	蕭何世家	一一
朱舜水	二九二、三〇五、三〇九、三三三、三五七、三五八	俊寛	一四〇	松下村塾	三九、二七四
儒者	一九二、二〇八—二二六、二五九、二六〇	句試	五、六一	貞觀政要	九〇、一六六、一九九、二〇〇
手跡	二六五—三〇五、三三三、三三八、三五一	春秋左氏傳	五八—六六、二五六、二五七、二九七	書紀(日本書紀参照)	一六、一七、二二、三一—四一、七五
集大成	三五四、三五三	春秋試	三三	書紀紀年の誤	三八、三九
重代の學者	一一七、一五〇	駿臺雜誌	二五、二五七	承久亂	一三〇、一五一、一六〇
種痘	二三四	淳和院	二六八、三〇〇、三〇三	書經	五八、六〇、五七、二六六
種痘館	二六二	淳和獎學兩院の別當	一〇四、一六二	助教(すけはかせ)	一三〇、一五一、一六〇
修道館(松江)	二七〇	序(支那古代の學校)	一六二	將軍	三四、一五三、一六〇、一六二、一七四
修道館(廣島)	二七〇	岸(同)	五五、五六	將軍賴經(藤原賴經)	一九二、一九三、二一七—二三四、二五〇
		攘夷論	二二〇、二六二	續日本紀	三六、三九、六四、七一—七六
		貞永式目	二九、一五七、一八二	(引用)菅野真道の上奏文	五
		莊園	四八、八四、一三三、一六一		

天平二年太政官奏	六〇、七三	上代の遊戯	二七	情欲	三六、三四三、三四八
郷玄	六〇、六二	樵談治要	一六、一六三、一八九	勝樂寺	一八三
相國寺	一七八、二四四	淨土往生	一九	淨瑠璃	一八〇、一八八、二八五
女子教育(各時代及び教育學者参照)	一八八、一八九	淨土諸宗	一九	晋書	七〇
女子の地位低下	一八八、一八九	淨土眞宗	二七七	信、信義	二八七、三〇六
女子の片務的服従	二六二、二六二	尙徳館	二七〇	仁	二〇四、二〇六、二六六、二八七、三三三
尙書(書經)	三三	聖徳太子	四二—四六、一三三	新瓦	三三三、三三六、三三六
書籍は心性の註解	三三	小兒必要養育草	二二、三三、三六	心學	三三、二七—二八〇
消息往来	二四、二四四	賞罰	三七七	仁義	一七一、二〇六、三〇〇、三三三、三五四
上代の家庭生活	三—七	商賣往来	二四五、二四六	仁義禮智	二〇六、二一〇、三五五、三五六
上代の教育理想	二六—三三	乘馬始	一三三、一六七	心經	一〇九、三三六、三三七、三四八
上代の教育機會	三—三三	庶物類纂	二二	神功皇后	一〇、七、一八九
上代の敬神	三〇	昌平校(昌平坂學問所参照)	三三	信仰	七五、三五、二六、三六、一九、二七五
上代の結婚	三—三三	昌平坂學問所二八、三七、二九—二七、三二	四三	塵劫記	二四七
上代の兒童養育	二六、二七	勝鬘經	四三	新古今集	一四七
上代の出産	二六、二六	庶民、庶人	四七、四九、七〇、六九—七〇、八八	仁齋日札	三五六
上代の女子教育	三—七	庶民の教育(各時代を見よ)	二五以下	新札往来	一八四
上代の忠君	三〇、二四三	稱名寺	一六、一五		
上代の道德	一〇、三	聖武天皇	一五		
上代の童話	一八五				

慎思	三一、二九三、二九四	推古天皇	一五、三〇、三〇二	崇文館	二〇、二〇六、二〇七	性	二〇、二〇六、二〇七	香	二〇
進士	六六、六七、一〇四	隨心教法	二〇、二〇二、三一一、三三三	性惡説	二〇、二〇六、二〇七	性惡説	二〇、二〇六、二〇七		
身自鏡	一八二	垂仁天皇	二五	星雲説	二〇、二〇六、二〇七	星雲説	二〇、二〇六、二〇七		
新實語教	二四六	數學	二五	聖王	二〇、二〇六、二〇七	聖王	二〇、二〇六、二〇七		
新十二月往來	一五四	菅野彦兵衛	二五九	聖學、聖教	二〇、二〇六、二〇七	聖學、聖教	二〇、二〇六、二〇七		
人身實買	五五、一五七	菅野眞道	三六、三九、四三	栖霞寺	二〇、二〇六、二〇七	栖霞寺	二〇、二〇六、二〇七		
仁政	一四三、一四五	菅原氏	一〇四	菁莪堂	二〇、二〇六、二〇七	菁莪堂	二〇、二〇六、二〇七		
針生	六九	菅原清公	一〇四	正義堂	二〇、二〇六、二〇七	正義堂	二〇、二〇六、二〇七		
新撰類聚往來	一八四	菅原爲長	一〇四	聖教要録	二〇、二〇六、二〇七	聖教要録	二〇、二〇六、二〇七		
心即理	二二	菅原道眞	一一、一〇四、一〇五	(引用)師道論	二〇、二〇六、二〇七	(引用)師道論	二〇、二〇六、二〇七		
辰孫王	三九	杉田玄白	二二	靜座	二〇、二〇六、二〇七	靜座	二〇、二〇六、二〇七		
神道	二六、二九、三九、七五、二八〇、二八六	杉田成郷	二六二	誠之館	二〇、二〇六、二〇七	誠之館	二〇、二〇六、二〇七		
人道	三〇、三四、三六	助教	二六八	世襲職業	二〇、二〇六、二〇七	世襲職業	二〇、二〇六、二〇七		
神代	三、一六、四〇	崇高堂	二六八	聖書(儒書)	二〇、二〇六、二〇七	聖書(儒書)	二〇、二〇六、二〇七		
審問	三二、二九三、二九四	須佐之男命	二八、三三	聖人	二〇、二〇六、二〇七	聖人	二〇、二〇六、二〇七		
人欲	三三、二八九、三六七	數字	二九、二九六						
神話	一五、三四、四〇、一八五、一八六	崇神天皇	二四六						
		鈴鹿定親	二四六						
		鈴木驥園	二四六						
		鈴木叔清	二四六、三〇〇						

ス

セ

聖人の教、聖人の道	三五〇—三五五、三七八	責善	三〇八	宣耀殿の女御	二二
正心誠意	二九一	寂然動かす	三三五		
性善説	二〇六—二〇九、二一九、二五〇—二五二	石門心學	二六		
精粗	三二、三三	絕對一元の善	三〇、二八、三二		
生徒の人格尊重	三〇七	折衷學、折衷學派	三五—三九、二七、三〇		
聖堂	二八、三三—三三〇、三三〇—三三三	節用集	一八三		
聖堂(長崎)	二六四	説話	一八七		
成童	二四〇、二四一	是非の心	一〇六、一〇七、一〇八		
精得館	二四五	善	二九—三三、三三		
性の教育	二四〇	善惡	三三		
性に率ふ	二八〇、二八二、二八一	前九年の役	三三		
聖廟	二五〇、二五二、二五三	再牛	三三		
西洋の文物	一九九、二〇一	戰國時代	一七四—一七八、一八四—二〇六		
西洋醫學所	二六二	千字文	三七、三九、九〇、二九五		
西洋數學	二六二、二六七	禪宗、禪風	二九、一四、二〇八、二一〇		
性理學	三二、二七七	染色	二五		
關孝和	三三	洗心洞	二六		
赤子の心	三三	洗濯	二六、二八三、三三		
		先王、先王の道	三三〇—三三六		
		宣命、天平勝寶元年の	八〇		

リ

祖先崇拜 二八一、二八二、三〇九
 宋儒 二五、三五、三五、三六七
 造士館 二七一
 相對的文化 一三三
 帥殿(藤原伊周) 一四七
 素讀 二五、二六、二六、三〇、三〇、三〇
 素讀所 二五
 蘇東坡 三六
 蘇民將來 一八五
 染殿左大臣 一五
 壯猶館 二六九
 僧侶、僧門、僧徒 八一九、二九、一六八
 一五、一五、一六、一六、一六、一六
 徂徠先生學則 三六九
 徂徠先生答問書 三六八、三六九
 村校 一八一
 孫子 六〇、三〇
 尊王心 三、二六、一三、一〇、三八、三五、三六〇

體育 三九
 大學(支那の) 一五、一八、三三
 大學、大學寮 四一七、七、九三
 一〇、二六、二八、二五、二九
 大學制度の變遷 九三—一〇五
 大學頭 四、二九、三四、三五、一六〇
 大學の別曹 一〇三
 大學の衰頹 八—一〇五、一四八、一四九
 大學(書) 二—二八、二四、二六、二六
 二九、三五、三三
 胎教 二二、三三、三〇、三九、三七
 太極 二〇九
 臺記 一〇六、一五
 大疑錄 三〇
 醍醐天皇 九八、一〇八
 大成殿 二八、三〇
 大日本史 六五、九五、二七
 太平記 一四、一四、一六、一七

(引用) 詩歌は朝廷の 一七二
 行旅の往反路を曲げ 一七六
 大寶令 七、四七—七七、九五、一四、一五七
 大名 一三、一六、一七、一〇—一八、三三
 平將門 一四
 高足 一五、一六
 高井關山 一四六
 高橋波自米の女 六
 多喜安元 二六一
 竹内式部 二六
 竹馬 九三、三六、一六八、三三
 竹取物語 一八六
 竹子争(狂言) 一七九
 多久茂文 二二
 多久學校 二七
 太宰府 六九、七〇、九
 太宰春臺 三三、三六
 大戴禮 三三、三六、二九七
 橋氏公 一〇一
 橋三千代 九

夕

七夕 二八、二八八
 谷時中 二五
 田沼意次 三三、三七、三五
 玉木葦齋 二六
 玉木吉保 一八、一八四
 たましひ(大和魂) 一〇八
 たはれぐさ(書) 三九
 彈琴 一〇九—一三、一四、一五、一六、一六
 短冊の認め方 三九
 男女席を同じうせず 二〇、三三、三九
 男尊女卑 四
 誕生祝 三三
 丹波氏 二八
 丹峰和尚 一八四
 段揚爾 四一
 鍛鍊主義(嚴格主義を見よ) 四一

近松門左衛門 二九〇、三七一—三九、三六、三一、三三
 ちくらが沖 一八八
 稚兒 一八二
 兒教訓 一八一
 知行合一 二二
 治國平天下 三二、二七、二九
 致知 二二、三三
 忠湯 三九、三三
 茶花 二四
 茶、忠君 三〇、七、一四—一四、三〇、三〇
 忠孝 二二、三〇、三〇
 忠孝一本 三〇
 中古三十六歌仙 一三
 忠恕 一〇
 忠信 二〇七、二九二、三〇、三六、三七
 中尊寺經藏、金色堂 八五
 中庸(書) 三三、三六、二九—二七、三二、三三、三三
 (引用)天命之性といふ 三三

張橫渠 二〇八
 長人安民の徳 三五
 朝鮮 三、四、一七、三三、三〇—三
 朝鮮征伐 一九
 長州藩 二九
 朝廷 一三、三—四、八、三、七—六、八、九、九、一六、一三、二九、四八、一六、一九、一九
 直觀教授 一〇—一〇四
 町人 二九七、二九九、三四五
 朝鮮群載 一四
 致良知 二二、三六

ツ

徒然草

(引用)子と云ふもの無くて 二三四

テ

庭訓往來 一五四、一五七、一八二、三四五、三四八
 程子 二九〇、二九三
 程伊川 二〇八—二一一
 程朱 二一〇、一五五、三〇〇、二七九
 程朱學 一七七、一九八、二二一—二三七、二五九
 二六七、二七八、三〇九、三五五、三五七
 程明道 二〇八
 貞操、貞烈 一四四、一五九、一七七、二〇六、三三九、三五〇
 手紙 一五五、二四六、二九九
 手島堵庵 二四六、三七七
 手島和庵 二三八
 哲學 二〇八、二〇九、二二二、二二六
 鐵眼 三三三
 鐵砲 一七六、二〇一、三三〇
 手習 一八二、一九〇、二四一—二四七、二六四、
 二九五、二九九、三三六、三三七、三六六

手習師匠

二四二、二四三、二四七、三三三、三六六

手習始

一三三、一六七

手本

二二二—二四八、三三六

寺

一八二—一八三、一九〇、二四一

寺入

一八一、二四四

寺子屋

七、一五四、一五五、一六四、一九一—一八四

寺子屋の特色

三三三、二四一—二四九、二八四、二九五、二九九、三〇九

田樂

二四九

天子

一三五、一九九

天主坊

九〇、二〇〇、二〇一、三三二

天主教

一五五—一九九、二〇一—二〇三

傳説

三、三三、三五、一六六—一八八

傳説の整理

一五—一七、四〇

天性

二八八、三三八、三三八

天地自然の道

三三六、三三〇—三三二

天地と徳を合す

三四一

天地の化育に參す

三五五

天地の心

二七、二六八

天地の正氣

三四二、三四四

天地は師なり

三四三

天智天皇

五

天道

二〇九、二八八、三〇一—三三五

天皇

三〇、三四、三三〇、一四二、一九三、一九五

天皇を神と敬ふ

三〇

天武天皇

六四、七四—七七

天命

三四一、三四三、三四六、三四七

天文學

二二二、二二五、二二九

天文生

六九

典藥寮

五四、五五、六八、八〇、九七

天理

二九一—三二二、二六七、二八九、三五五、三五七

天理流行

二二〇

唐

三四六、三七、七、一〇三、二〇八

唐の學制

五七、五八

東海道往來

二四五

道學者

三六〇

常盤潭北

二三八、二九

(教育説)嚴格主義

二六八

德育、徳教

三四、一五九、二二一、二九九、三〇一

徳川氏

二七、三〇六、三七、三八、三三三、三三六

徳川家重

一七、一九一—二〇〇、二四四、三三三

徳川家綱

二二〇

徳川家宣

二二二

徳川家齊

二二二

徳川家治

二二四

徳川家光

二二八、二五〇

徳川家康

一九三、一九六、一九九—二〇一

徳川綱吉

二二六—二二九、二五五、二五〇、二五一

徳川義直

二二八、二五〇、二七一

徳川光圀

二二七

徳川禁令考

二六六

讀書

一五四、二四七、二五五—三〇〇、三三二

讀書の指導

三三三、三四一—三四五、三五〇—三五七、三八八

讀書始

二九六—二九九、三四四、三五五

得長壽院

九〇、一三三、一六七

徳本堂

二七四

土佐隆成

一八六

土佐日記

九二、一〇四

登山

一五五、一六九

等持院殿御遺書

一七五

童子教

二九、三〇、二四四、二八二、二八三、二四五

童子問

二九二、三三六

(引用) 學問の功

三三三

個性論

三五八

藤樹書院

二七四、三三四

藤樹先生遺稿

三五

藤樹先生書簡雜著

三三一—三三四

道春點

二二八

東常縁

一七三

道成寺

一三六、一四一

圖書寮

七二

痘瘡

二三四

唐宋八家文

三三五

東大寺

一三九

徳行、徳

二〇九、二六七、二八八、二九〇—三〇六、

篤行

三三三、三三〇、三三二—三三三、三三六

都堂院

三二一、二九三、二九四、三〇〇

道徳、道義

四一六、一〇、二、四、四、七、七、

道徳實踐の指導

二九、三〇—三四、一六八、一七六、二〇六、

道徳判斷力

三三、三四、三四八、二七三、二七六、二八八、

鳥羽天皇、鳥羽法皇

三〇一、三一一—三三八、三三三、三三〇—三三〇

都鄙問答

二九五、三〇七、三七七

東福寺

二二二

とみ(鳥見)山

八五、一九、二六八

具平親王

二七九、二六〇

杜預

一七八

豊臣氏

一四六

豊臣秀吉

一四三

豊臣秀吉の禁教令

一七、一九八、一九九

童話

一七、一九八、一九九

童話考

一八五、一八六

童話考

一八五

初登山手習教訓書	二六九
服部南郭	二七三
服部善藏	二八〇
はせつかへ(丈部)子春丸	二八四
花園院天皇宸記	二八六
花園上皇	二八七
花咲爺	二八七
放ち書	二八七
花鳥教場	二七〇
搞保己一	二六〇
母の名を負ふ	二五
林氏	二五、二七、三三、三〇一、三〇
林述齋	二七、三六、三五
林春齋	二五
林春徳	二五
林道春(羅山)	一九九、二〇四、二〇五、二〇八、二〇
林鳳岡	二五、二八、二九、二二
林宗二	一八三
はらから(同腹)	二二
播磨風土記	二八
鏝阿寺	二五
藩學	二七、三二、三五、二七、二九
番匠往徠	二四、二四
蕃書取調所	二二
樊遲	二四
卑怯未練	二四、二四
非業博士、非受業博士	二七
非重代の學者	二七
日足す、日足る	二五、二七
秘傳、秘事口傳	二六、二七、二七、二九
入の師となるを好む	二〇
一筋の薬	一八
人に忍びざるの心	二〇
尾藤二州	二七、二八、二九
雑遊	二七、二八、二九
比賣鑑	二六、二九、三三
百姓往來	二五、二六
廟堂	二九
兵法	二九、三〇
平泉	二五
平賀源内	二九、三〇
平田篤胤	二九、三〇
平假名	二四、二五、三三
廣瀬淡窓	二七、二〇
武王	二〇、三三
府學	二九、七〇
深田正室	二九
武技、武藝	二二、二四、二四、二五、二七、二七、二七、三三、三三、二五、三〇
復初説	二〇、二二、二九、三五
福富草子	二八、一八七
武訓	三〇、三三
武家	二四、二七、二〇、二七、二九、二〇

武家諸法度	二〇
父系時代	二五
父權時代	二五
婦言	二八、三三
婦功	一九〇、二五、二八、三三
武士	八五、二六、一三、三以下
武士道	二四、二六、三、四、一四、一六、一七、二五、二六、三二、三四〇
武士の主従關係	二四、二四、二五、一六
武士と學問	二五、二七、二九
藤岡作太郎	二八〇
藤原氏	四七、二八、五、九一、二〇、二二、二六、二七、二七、二八、二九、二五
藤原顯雅	二七
藤原兼家	八九、九二、九三、一五
藤原兼雅	八七
藤原季英	一〇一、一〇三、一〇八
藤原惺高	一九八、二〇〇、二〇一、二〇七
藤原忠通	一四
藤原時平	一〇六、一〇八
藤原俊忠	二七
藤原仲麻呂	七
藤原仲忠	八
藤原雅材	一〇七
藤原明衡	二〇、二四
藤原道綱	八
藤原武智麻呂	六
藤原師輔	一九
藤原基經	二五
藤原賴長	一五、二四
藤原利仁	六
藤原氏(奥州の)	二五
藤田三郎	二五、二五
富士野往來	一八四
伏見城	一六、一九
富士見享文庫	二〇
佛教	六、二二、二五、七四、八三
佛教の傳來	二五、二六、二四、七〇、二八、二九、二〇八、二五、三三以下
佛經、佛書	一三、一七
服虔	六一
物徂徠	三三
物欲	二〇、二五
武の本末	二九、三〇、三三
史部	二〇、二四、二二
文相撲(狂言)	一八〇
賦役令	七
婦客	三三、三三
武勇	三〇、三三、三三、二四、二五
文學、文藝	二二〇、二四、二九、三三、三三
文訓	二七、三三
文庫	一〇、二七
文行忠臣	二九、三〇、三六
文章は道の興	二九
文武館	二六
文武並行	一七五、一九七、二〇一、二八、三六、三三、三三、三七、三八
文王	一〇、三三
文の本末	二九、三〇、三三

平安京 八二、九三、九五
 平安朝 三、一一四、五、六三、七二
 七九、八〇、九一—一二五、二九以下
 學藝の衰運 一一五
 家庭生活 七
 貴族の家庭教育 一〇五—一二五
 教育の特色 八三
 子供の愛 九二、九三
 私學 一〇一、一〇三
 女子教育 一〇七—一二五
 庶民の教養 一二五、一二六
 大學 九三—一〇一
 地方の類廢 八二—八七、三—一二三
 童話 一八六
 佛教 八五、二八
 文庫 一〇三
 遊戲 九三
 平民 一七

平家物語 二九、四一、七一、一七五
 平民 八三、二九、三六、一五、六三、一六四
 勉學、勉勵 一七九、一八〇、一九〇、一九四、二四八、三八〇
 辨名、(引用)道は統名 三〇七、三〇九
 詩書禮樂 三六三
 木
 ほあかりの(火明)命 一八
 墨子 二〇六
 母系制度の名残 三三、三四、五二
 保科正之 三三、三三
 砲術(鐵砲を見よ) 二六三、二七七
 北條氏 二七—三三、一五、一九二、一九三
 北條顯時 一七
 北條實時 一五
 北條時政 二六、二四、二五
 北條時頼 一三
 北條高時 一四
 北條政子 一五、一八、一九

北條泰時 一三九、一四三、一五二、一七五
 紡績、紡織 三三、三三
 細井平淵 三三、三三—三三九
 (學說)教育の効果 三三、三三
 教育の必要 三〇—三二
 教育の方法 三三
 教師 三三
 個性主義 三三、三三
 詩文 三三
 賞罰 三三
 折衷學 三三、三三、三三
 善提心 一七
 鳳潭 三三
 法華經 三三、三三、三三
 發心集 一五
 本牟智和氣皇子 三三、三三
 ホメロス 三三、三三、三三
 堀河學派 三三、三三、三三
 堀杏庵 三三、三三
 法隆寺 三三

本地華述説 一五、一五、一三〇
 本然の性 三三、三三
 本草學 三三
 本能 二七
 本問資忠 一六
 マ
 舞の本 一五、一八、一〇一
 勾大兄皇子 一六、一八、一五
 枕草紙、(引用)美しきもの 九
 文は文集 一〇三
 將門記 一〇、一四
 増鏡 一〇、一四
 (引用)古への行幸などは 一五
 關の東を都の外として 一五
 末世、末代 八、二六、二八、二九、三〇
 松崎謙堂 三三
 松平定信 二七、二八、二九、三〇
 松永尺五 三三、三三
 松本良順 三三

まな(魚)始 一三、一七
 學んで知る 二九
 まこと 三三、三三
 萬葉集 五〇—五三、七一—八七、四七、一八二
 (引用)勝鹿の眞間の娘子云々 五〇
 世間に住難きを哀しむ 五
 陸奥より金を出せし時云々 三〇、三三
 三浦梅園 三三、三三、三〇八
 三浦博士(周行) 一八、一八
 みかど(國家) 三三
 三河武士 一七
 道 三三、三三、三三、三三、三三
 道に志す 二四、二九、三三
 道は統名 三三
 箕作阮甫 三三
 水月學派 三三
 南二階(昌平校) 三三、三三

南村梅軒 三三
 南淵先生 三三
 源頼朝 二六、二四、一五、一八、一八
 源頼朝の敬神崇佛 一五
 源實朝 一三、一三
 源頼政 一三
 身のかため 一〇
 箕かづき(狂言) 一五、一八
 三宅觀瀾 二七
 三宅尙齋 二二
 三宅石庵 三三、三三
 宮崎安貞 三三
 明經、明經道 一七、一七、二五
 明經博士 九七、九一
 明經生 九七、一〇〇
 三善民 一八
 三善清行 九八
 妙心寺 二五
 明法、明法道 六六、六六、二七
 明法博士 六六、六六

山上憶良	二五	横笛	二六、二四	頼山陽	三
山行かば草むす屍	六	吉田光由	二七	蘭馨	二六、二六三、二七
山田春城	一七、三三、三〇〇、三三〇	吉田松蔭	三七、二七四		
槍	一七、三三、三〇〇、三三〇	吉田連宜	七		
		吉川惟足	二九		
維摩經	三	芳野金陵	二六二	理	一〇九、二四、三五、三三
ゆゑ(湯坐、湯人)	六	用捨箱(書)	二六	理氣妙合	三四、三四〇—三四一
遊學往來	一四、一六七	養生訓	二五、三三	雜屋學訓	二六八、三〇〇
夕霧	一〇五	養生所	二五	(引用) 讀書習字の順序	二九八
湯島(江月)	二八、三四、三五〇	米澤學校相談書	三三	武の本末	三〇〇
有造館	二六、二五五	陽明學	二七、三〇—三〇、三五、三六	理氣二元論	三〇二
ゆづき(弓月)君	四〇	二六、三〇二	二六、三〇二	陸王	三〇、三九
弓	三四、一〇、三五、三〇〇、三三〇	幼を幼とす	三〇、三〇〇	六學	五七、七
弓始	一三、一六七	要約	二七	六藝	二六、三九、三三、三九
洋學	二五、五八、六二、三三	餘力あれば文を學ぶ	二九〇、二九三	陸軍所	二六四
謝曲	一六、七三、一七四、一八七	鏡の着初	一三	陸象山	三三、三四
養賢堂	二六			六韜三略	一八、三四
				六論衍義大意	三三、三四
				六經	三三
				立教館	二六八
				立正安國論	一四

立志	二二、二五三、三三	禮樂	三六、三四、三六、三六	和歌	七一、一〇、一九、四以下
留學生	四、八一、二六三	歴史	三三、三五、五八	和魂	一〇八
柳下惠	三三	曆博士	三	和魂漢才	二、一〇八
劉向新序、劉向說苑	二九七	歴朝詔詞解	二	臨阪義堂	二七六
柳亭種彦	二六	連歌	一五三、一六四、一七一—一八二	和氣氏	二八
了雲	二七七	廉塾	二七四	和氣廣世	七九
閑塾	一〇二	蓮如	二七七	和氣廣世	九四、九五、一〇三
合義解	六〇、六			和學の語源	一四九
兩統の分立	三三			和學講談所	二六〇
良心	三三、三三			和漢の學、和漢の才	一四、一四八、一五〇
良知	二〇七—二二二、三三〇—三三三、三三三	朗詠	二七、二四九	和國	一八八
輪講	二三四、二五、三三、二九七	朗詠集	一〇七—一二三、一八二、一九〇	和俗童子訓	三四—三三九、三〇二、三三三—三三九
輪讀	二五七	六波羅重時(北條重時)	一五七	日本教育史索引(終)	
		老人雜話	一七四		
		浪人	二四、二五五		
		羅馬字綴	二二三		
		論語	三〇、五九—六三、八三、二五—三三		
			二五七、二六、二八—二七、三四、三四、三五、三六、三五		
			(引用) 教あり類なし		
			三七三		

1175

大正十二年三月七日印
大正十二年三月十日發
大正十四年五月一日三版發行



發行所 東京神田區錦町三丁目十一番地
振替貯金口座東京五八一八〇番

著作者 高橋俊乘
發行者 辻本經藏
印刷者 平山泉
製本者 大津金造

日本教育史……奥附
正價金參圓

印刷所 澁口印刷所

●●●目書版出會究研育教●●●

- 名古屋市視學 水木 梢著 文化理科新教授法 第五版 四六判函入美本 正價金二圓五十錢 送料十八錢
- 奈良女高師教授 志垣寬著 文化國史新教授法 第五版 四八判函入美本 正價金二圓五十錢 送料十八錢
- 奈良女高師教授 石澤吉磨著 文化家事新教授法 第八版 四六判函入美本 正價金二圓五十錢 送料十八錢
- 廣島高師教授 菊池勝之助著 文化地理新教授法 第八版 四六判函入美本 正價金二圓五十錢 送料十八錢
- 鳥取高師教授 峰地光重著 文化綴方新教授法 第二版 四六判函入美本 正價金二圓五十錢 送料十八錢
- 名古屋市視學 水木 梢著 文化算術新教授法 第三版 四六判函入美本 正價金二圓五十錢 送料十八錢
- 小學修身研究者 椋葉勇著 德育新修身實演例話 新刊 四六判函入美本 正價金二圓五十錢 送料十八錢
- 第五高等學校教授八波則吉著 第二國語の講習 近刊 四六判上製函入美本 正價金 參圓 送料十八錢
- 音樂批評大家 柿沼太郎著 ショパンの生涯と手紙 二版 四六判ホイント組美本函入 正價金參圓五十錢 送料十八錢
- 音樂新潮玉簪 柿沼太郎著 ベートベンの作品 新刊 四六判ホイント組美本函入 正價金參圓五十錢 送料十八錢

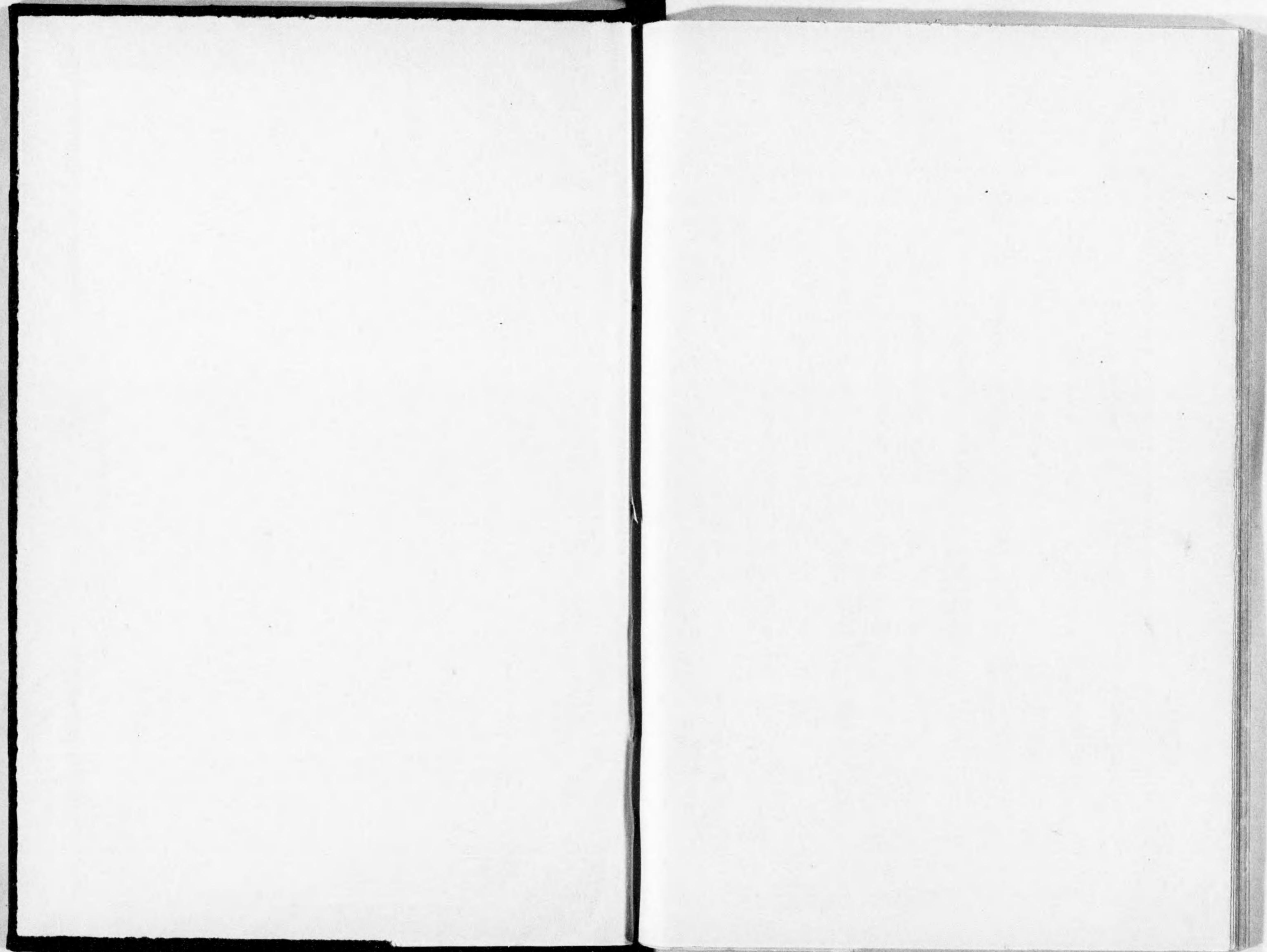
●●●目書版出會究研育教●●●

- 第五高等學校教授八波則吉著 讀本國語の講習 第七版 四六判約五百頁函入美本 正價金 三圓 送料十八錢
- 第五高等學校教授八波則吉著 童話と夢の國から 新刊 四六判頗る美本精畫入 正價金壹圓五十錢 送料十二錢
- 文部省少年團 調査委員 貞寺龍溪著 少年團訓練法要義 再版 四六判上製美本函入 正價金壹圓五十錢 送料十二錢
- 酒田高女校長 神長 樞著 教育的悲劇 新刊 四六判上製函入 正價金壹圓二十錢 送料十二錢
- 教育研究會編纂 全國高等學校試驗問題集 新刊 四六判ホイント組約二百五十頁 正價金壹圓貳拾錢 送料十錢
- 府立第三高女教授木下一雄譯 シヨパン人間相愛の道德 新刊 四六判約三百五十頁函入上製 正價金貳圓五十錢 送料十八錢
- 宗教大學教授 大村桂巖著 教育學汎論 再版 菊判ホイント組上製美本 正價金貳圓八拾錢 送料十八錢
- 陸軍教授 松濤泰巖著 女子國民教育學 (文部省檢定済 女學校用教科書) 正價金貳圓七拾錢 送料六錢
- 奈良女子高師 教授 文學士 松濤泰巖著 女子國民教育學 (文部省檢定済 女學校用教科書) 正價金貳圓七拾錢 送料六錢
- 法學博士 岡 實著 國民法制要義 菊判約百五十頁表三枚入 正價金 七十錢 送料六錢
- 法學博士 岡 實著 國民經濟要義 菊判約百四十頁表二枚入 正價金六十六錢 送料六錢

(文部省檢定済 師範學校、中學校、女學校、
商業學校、工業學校、農學校、法制經濟科)

●●● 目書版出會究研育教 ●●●

- | | | | |
|-----------------|--|----------------|-----------------|
| □文學博士 吉田熊次著 | 增補最近教育思潮 八版 | 四六判約四百頁函入 | 正價金 三圓 送料十八錢 |
| □東京帝大教授 入澤宗壽著 | 新教授法原論 五版 | 四六判約四百頁革函入 | 正價金 三圓 送料十八錢 |
| □東京帝大教授 阿部重孝著 | 藝術教育 三版 | 四六判約五百頁革函入 | 正價金 三圓三十錢 送料十八錢 |
| □東京帝大講師 上村福幸著 | 知能測定法 四版 | 四六判約八百頁ポイント組 | 正價金 五圓三十錢 送料廿四錢 |
| □奈良女子高師教授 松濤泰巖著 | 全我活動の教育 七版
<small>プロジェクト・メソッドの批判的研究</small> | 四六判約四百數十頁革函入 | 正價金 參圓 送料十八錢 |
| □東京帝大研究室 岡部彌太郎著 | 教育的測定 再版 | 紙數五百頁表四十表背革函入 | 定價金 四圓 送料廿三錢 |
| □文學士 高木秀一著 | 個人價值論 再版 | 四六判約四百頁革函入 | 正價金 參圓 送料十八錢 |
| □京都帝大研究室 高橋俊乘著 | 日本教育史 再版 | 四六判約四百頁革函入 | 正價金 參圓 送料十八錢 |
| □國立武藏野學院長 菊池俊晴著 | 感化教育 再版 | 四六判約四百頁ポイント組函入 | 正價金 參圓 送料十八錢 |
| □東京帝大教授 入澤宗壽著 | 國民教育の思潮 再版
<small>(修身訓練の根本問題)</small> | 四六判約三百數十頁函入 | 正價金 貳圓三十錢 送料十八錢 |



終